

おぐらひやくにんいっしゅ
📖 小倉百人一首一覽

第1首～第10首

第11首～第20首

第21首～第30首

第31首～第40首

第41首～第50首

第51首～第60首

第61首～第70首

第71首～第80首

第81首～第90首

第91首～第100首

● 番号の色は収録歌集を示した。 ■ 『古今和歌集』 (24 首) ■ 『新古今和歌集』 (14 首) ■ それ以外の勅撰和歌集

	歌人	歌	歌 (仮名読み)
1	てん ぢ てんわう 天智天皇	秋の田の かりほの庵の 苦をあらみ わが衣手は 露にぬれつつ	あきのたの かりほのいほの とまをあらみ わがころもでは つゆにぬれつつ
2	ぢ とうてんわう 持統天皇	春過ぎて 夏来にけらし 白妙の 衣ほすてふ 天の香具山	はるすぎて なつきにけらし しろたへの ころもほすてふ あまのかぐやま
3	かきのものひと まろ 柿本人麻呂	あしひきの 山鳥の尾の しだり尾の ながながし夜を ひとりかも寝む	あしびきの やまどりののをの しだりをの ながながしよを ひとりかもねむ
4	やまべのあかひと 山部赤人	田子の浦に うち出でて見れば 白妙の 富士の高嶺に 雪は降りつつ	たごのうらに うちいでてみれば しろたへの ふじのたかねに ゆきはふりつつ
5	さるまるたい ふ 猿丸大夫	奥山にもみぢ踏み分け 鳴く鹿の 声聞く時ぞ 秋はかなしき	おくやまにもみぢふみわけ なくしかの こゑきくときぞ あきはかなしき
6	ちゅう な ごんやかもち 中納言家持	かささぎの 渡せる橋に 置く霜の 白きを見れば 夜ぞ更けにける	かささぎの わたせるはしにおくしもの しろきをみれば よぞふけにける
7	あべのなかまろ 阿倍仲麻呂	天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも	あまのはら ふりさけみれば かすがなる みかさのやまに いでしつきかも
8	き せんほふし 喜撰法師	わが庵は 都のたつみ しかぞ住む 世を宇治山と 人はいふなり	わがいほは みやこのたつみ しかぞすむ よをうちやまと ひとはいふなり
9	を のの こまち 小野小町	花の色は うつりにけりな いたづらに わが身世にふる ながめせしまに	はなのいろは うつりにけりな いたづらに わがみよにふる ながめせしまに
10	せみまる 蟬丸	これやこの 行くも帰るも 別れては 知るも知らぬも 逢坂の関	これやこの ゆくもかへるも わかれては しるもしらぬも あふさかのせき

11	さんぎ たかむら 参議 篁 をのたかむら (小野篁)	わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと 人には告げよ あまの釣舟	わたのはら やそしまかけて こぎいでぬと ひとにはつげよ あまのつりぶね
12	そうじやうへんぜう 僧正遍昭	天つ風 雲の通ひ路 吹きとちよ をとめの姿 しばしとどめむ	あまつかぜ くものかよひぢ ふきとちよ をとめのすがた しばしとどめむ
13	やうぜいゐん 陽成院	筑波嶺の 峰より落つる みなの川 恋ぞつもりて 淵となりぬる	つくばねの みねよりおつる みなのがは こひぞつもりて ふちとなりぬる
14	みなもとのはる 源 融	陸奥の しのぶもぢずり 誰ゆゑに 乱れそめにし 我ならなくに	みちのくの しのぶもぢずり たれゆゑに みだれそめにし われならなくに
15	くわうかうてんわう 光孝天皇	君がため 春の野に出でて 若葉つむ わが衣手に 雪は降りつつ	きみがため はるののいいでて わかなつむ わがころもでに ゆきはふりつつ
16	ちゆう な ごんゆきひら 中納言行平	立ち別れ いなばの山の 峰に生ふる まつとし聞かば 今帰り来む	たちわかれ いなばのやまの みねにおふる まつとしきかば いまかへりこむ
17	ありはらのなりひら あそん 在原業平朝臣	ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川 から紅に 水くくるとは	ちはやぶる かみよもきかず たつたがは からくれなるに みづくくるとは
18	ふちはらのとしゆき あそん 藤原敏行朝臣	住の江の 岸に寄る波 よるさへや 夢の通ひ路 人目よくらむ	すみのえの きしによるなみ よるさへや ゆめのかよひぢ ひとめよくらむ
19	い せ 伊勢	難波潟 短き蘆の ふしの間も あはでこのよを 過ぐしてよとや	なにはがた みじかきあしの ふしのまも あはでこのよを すぐしてよとや
20	もとよしんわう 元良親王	わびぬれば 今はた同じ 難波なる みをつくしても あはむとぞ思ふ	わびぬれば いまはたおなじ なにはなる みをつくしても あはむとぞおもふ

21	そせいほふし 素性法師	今来むと言ひしばかりに 長月の 有明の月を 待ち出でつるかな	いまこむと いひしばかりに ながつきの ありあけのつきを まちいでつるかな
22	ふんやのやすひで 文屋康秀	吹くからに 秋の草木の しをるれば むべ山風を あらしといふらむ	ふくからに あきのくさきの しをるれば むべやまかぜを あらしといふらむ
23	おほえの ちさと 大江千里	月見れば 千々にもものこそ かなしけれ わが身ひとつの 秋にはあらねど	つきみれば ちぢにもものこそ かなしけれ わがみひとつの あきにはあらねど
24	すがはらのみちざね 菅原道真	このたびは 幣も取りあへず 手向山 もみぢの錦 神のまにまに	このたびは ぬさもととりあへず たむけやま もみぢのにしき かみのまにまに
25	さんでうの う だいじん 三条右大臣	名にし負はば 逢坂山の さねかづら 人に知られで くるよしもがな	なにしおはば あふさかやまの さねかづら ひとにしられで くるよしもがな
26	ていしんかう 貞信公	小倉山 峰のもみぢ葉 心あらば 今ひとつの みゆき待たなむ	をぐらやま みねのもみぢば ころろあらば いまひとつの みゆきまたなむ
27	ちゆうな ごんかねすけ 中納言兼輔	みかの原 わきて流るる いづみ川 いつみきとてか 恋しかるらむ	みかのはら わきてながるる いづみがは いつみきとてか こひしかるらむ
28	みなもとのおむねゆき あそん 源 宗子朝臣	山里は 冬ぞさびしさ まさりける 人目も草も かれぬと思へば	やまざとは ふゆぞさびしさ まさりける ひとめもくさも かれぬとおもへば
29	おほしかふちのみ つね 凡河内躬恒	心あてに 折らばや折らむ 初霜の 置きまどはせる 白菊の花	ころろあてに をらばやをらむ はつしもの おきまどはせる しらぎくのはな
30	み ぶのただみね 壬生忠岑	有明の つれなく見えし 別れより 暁ばかり 憂きものはなし	ありあけの つれなく見えし わかれより あかつきばかり うきものはなし

31	さかのうへのこれのり 坂上是則	朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに 吉野の里に 降れる白雪	あさぼらけ ありあけのつきと みるまでに よしののさとに ふれるしらゆき
32	はるみちのつら き 春道列樹	山川に 風のかけたる しがらみは 流れもあへぬ もみぢなりけり	やまがはに かぜのかけたる しがらみは ながれもあへぬ もみぢなりけり
33	きのとものり 紀友則	ひさかたの 光のどけき 春の日に しづ心なく 花の散るらむ	ひさかたの ひかりのどけき はるのひに しづごころなく はなのちるらむ
34	ふちはらのおきかぜ 藤原興風	誰をかも 知る人にせむ 高砂の 松も昔の 友ならなくに	たれをかも しるひとにせむ たかさごの まつもむかしの ともならなくに
35	きのつらゆき 紀貫之	人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香にほひける	ひとはいさ ころもしらず ふるさとは はなぞむかしの かにほひける
36	きよはらのふか や ぶ 清原深養父	夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを 雲のいづこに 月宿るらむ	なつのよは まだよひながら あけぬるを くものいづこに つきやどるらむ
37	ふんやのあきやす 文屋朝康	白露に 風の吹きしく 秋の野は つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける	しらつゆに かぜのふきしく あきののは つらぬきとめぬ たまぞちりける
38	う こん 右近	忘らるる 身をば思はず 誓ひてし 人の命の 惜しくもあるかな	わすらるる みをばおもはず ちかひてし ひとのいのちの をしくもあるかな
39	さん ぎ ひとし 参議 等	浅茅生の 小野の篠原 しのぶれど あまりてなどか 人の恋しき	あさぢふの をののしのはら しのぶれど あまりてなどか ひとのこひしき
40	たひらのかねもり 平兼盛	忍ぶれど 色に出でにけり わが恋は ものや思ふと 人の問ふまで	しのぶれど いろにいでにけり わがこひは ものやおもふと ひとのとふまで

41	みふのただみ 壬生忠見	恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり 人知れずこそ 思ひそめしか	こひすてふ わがなはまだき たちにけり ひとしれずこそ おもひそめしか
42	きよはらのもとすけ 清原元輔	契りきな かたみに袖を しぼりつつ 末の松山 波越さじとは	ちぎりきな かたみにそでを しぼりつつ すゑのまつやま なみこさじとは
43	ごんちゆう な ごんあつただ 権中納言敦忠	あひ見ての のちの心に くらぶれば 昔はものを 思はざりけり	あひみての のちのところに くらぶれば むかしはものを おもはざりけり
44	ちゆう な ごんあさただ 中納言朝忠	あふことの 絶えてしなくは なかなか 人をも身をも 恨みざらまし	あふことの たえてしなくは なかなか ひとをもみをも うらみざらまし
45	けんとくかう 謙徳公	あはれとも 言ふべき人は 思ほえて 身のいたづらに なりぬべきかな	あはれとも いふべきひとは おもほえて みのいたづらに なりぬべきかな
46	そねのよしただ 曾禰好忠	由良の門を 渡る舟人 かちを絶え ゆくへも知らぬ 恋の道かな	ゆらのとを わたるふなびと かちをたえ ゆくへもしらぬ こひのみちかな
47	えぎやうほふし 恵慶法師	八重葎 茂れる宿の さびしきに 人こそ見えね 秋は来にけり	やへむぐら しげれるやどの さびしきに ひとこそ見えね あきはきにけり
48	みなものしげゆき 源重之	風をいたみ 岩うつ波の おのれのみ くだけでものを 思ふころかな	かぜをいたみ いはうつなみの おのれのみ くだけでものを おもふころかな
49	おほなかとみのよしのぶ あそん 大中臣能宣朝臣	みかきもり 衛士のたく火の 夜は燃え 昼は消えつつ ものをこそ思へ	みかきもり ゑじのたくひの よるはもえ ひるはきえつつ ものをこそおもへ
50	ふぢはらのよしたか 藤原義孝	君がため 惜しからざりし 命さへ 長くもがなと 思ひけるかな	きみがため をしからざりし いのちさへ ながくもがなと おもひけるかな

51	みぢはらのさねかた あそん 藤原実方朝臣	かくとだに えやはいぶきの さしも草 さしも知らじな 燃ゆる思ひを	かくとだに えやはいぶきの さしもぐさ さしもしらじな もゆるおもひを
52	みぢはらのみちのぶ あそん 藤原道信朝臣	明けぬれば 暮るるものとは 知りながら なほ恨めしき 朝ぼらけかな	あけぬれば くるるものとは しりながら なほうらめしき あさぼらけかな
53	う だいしやうみつなのはは 右大将道綱母 みぢはらのみちつなのはは (藤原道綱母)	なげきつつ ひとり寝る夜の あくる間は いかに久しき ものとかは知る	なげきつつ ひとりぬるよの あくるまは いかにひさしき ものとかはしる
54	ぎ どうさんしのはは 儀同三司母	忘れじの 行く末までは 難ければ 今日を限りの 命ともがな	わすれじの ゆくすゑまでは かたければ けふをかぎりの いのちともがな
55	だい な ごんきんたふ 大納言公任 みぢはらのきんたふ (藤原公任)	滝の音は 絶えて久しく なりぬれど 名こそ流れて なほ聞こえけれ	たきのおとは たえてひさしく なりぬれど なこそながれて なほきこえけれ
56	いづみしき ぶ 和泉式部	あらざらむ この世のほかの 思ひ出に いまひとたびの あふこともがな	あらざらむ このよのほかの おもひでに いまひとたびの あふこともがな
57	むらさきしき ぶ 紫 式部	めぐりあひて 見しやそれとも わかぬ間に 雲がくれにし 夜半の月かな	めぐりあひて みしやそれとも わかぬまに くもがくれにし よはのつきかな
58	だいにのさん み 大式三位	有馬山 猪名の笹原 風吹けば いでそよ人を 忘れやはする	ありまやま ゐなのささはら かせふけば いでそよひとを わすれやはする
59	あかぞめ ぶもん 赤染衛門	やすらはで 寝なましものを 小夜ふけて かたぶくまでの 月を見しかな	やすらはで ねなましものを さよふけて かたぶくまでの つきを見しかな
60	こしきぶのな いし 小式部内侍	大江山 いくのの道の 遠ければ まだふみもみず 天の橋立	おほえやま いくののみちの とほければ まだふみもみず あまのはしだて

61	いせのたいふ 伊勢大輔	いにしへの 奈良の都の 八重桜 けふ九重に にほひぬるかな	いにしへの ならのみやこの やへざくら けふこのへに にほひぬるかな
62	せいせうなごん 清少納言	夜をこめて 鳥のそら音は はかるとも よに逢坂の 関は許さじ	よをこめて とりのそらねは はかるとも よにあふさかの せきはゆるさじ
63	さきやうのだいふ みちまさ 左京大夫道雅	今はただ 思ひ絶えなむ とばかりを 人づてならで 言ふよしもがな	いまはただ おもひたえなむ とばかりを ひとづてならで いふよしもがな
64	ごんちゆうな ごんさだより 権中納言定頼 (ふじはらのさだより 藤原定頼)	朝ぼらけ 宇治の川霧 たえだえに あらはれわたる 瀬々の網代木	あさぼらけ うちのかはぎり たえだえに あらはれわたる せぜのあじろぎ
65	さがみ 相模	恨みわび ほさぬ袖だに あるものを 恋に朽ちなむ 名こそ惜しけれ	うらみわび ほさぬそでだに あるものを こひにくちなむ なこそをしけれ
66	さきのだいそうじやうぎやうせん 前大僧正行尊	もろともに あはれと思へ 山桜 花よりほかに 知る人もなし	もろともに あはれとおもへ やまざくら はなよりほかに するひともなし
67	すほうのないし 周防内侍	春の夜の 夢ばかりなる 手枕に かひなく立たむ 名こそ惜しけれ	はるのよの ゆめばかりなる たまくらに かひなくたたむ なこそをしけれ
68	さんでうゐん 三条院	心にも あらでうき世に ながらへば 恋しかるべき 夜半の月かな	こころにも あらでうきよに ながらへば こひしかるべき よはのつきかな
69	のういんほふし 能因法師	嵐吹く みむろの山の もみぢ葉は 竜田の川の 錦なりけり	あらしふく みむろのやまの もみぢばは たつたのかはの にしきなりけり
70	りやうぜんほふし 良暹法師	さびしさに 宿を立ち出でて ながむれば いづくも同じ 秋の夕暮れ	さびしさに やどをたちいでて ながむれば いづくもおなじ あきのゆふぐれ

71	だい な ごんつねのぶ 大納言経信	夕されば 門田の稲葉 おとづれて 蘆のまろやに 秋風ぞ吹く	ゆふされば かどたのいなば おとづれて あしのまろやに あきかせぞふく
72	いうし ないしんわうけの き い 祐子内親王家紀伊	音に聞く たかしの浜の あだ波は かけじや袖の 濡れもこそすれ	おとにきく たかしのはまの あだなみは かけじやそでの ぬれもこそすれ
73	ごんちゆう な ごんまさふさ 権中納言匡房	高砂の 尾の上の桜 咲きにけり 外山の霞 立たずもあらなむ	たかさごの をのへのさくら さきにけり とやまのかすみ たたずもあらなむ
74	みなもとのとしより あそん 源 俊頼朝臣	うかりける 人を初瀬の 山おろしよ はげしかれとは 祈らぬものを	うかりける ひとをはつせの やまおろしよ はげしかれとは いのらぬものを
75	ふちはらのもととし 藤原基俊	契りおきし させもが露を 命にて あはれ今年の 秋もいぬめり	ちぎりおきし させもがつゆを いのちにて あはれことしの あきもいぬめり
76	ほつしやう じ にふだう 法性寺入道 さきのくわんぼく だいじやうだいじん 前 関白太政大臣	わたの原 漕ぎ出でて見れば ひさかたの 雲居にまがふ 沖つ白波	わたのはら こぎいでてみれば ひさかたの くもゐにまがふ おきつしらなみ
77	す とくゐん 崇徳院	瀬をはやみ 岩にせかるる 滝川の われても末に あはむとぞ思ふ	せをはやみ いはにせかるる たきがはの われてもすゑに あはむとぞおもふ
78	みなもとのかねまさ 源 兼昌	淡路島 かよふ千鳥の 鳴く声に いく夜寝覚めぬ 須磨の関守	あはぢしま かよふちどりの なくこゑに いくよねざめぬ すまのせきもり
79	さ きやうのだい ぶ あきすけ 左 京 大夫顕輔	秋風に たなびく雲の 絶え間より もれ出づる月の かげのさやけさ	あきかぜに たなびくもの たえまより もれいづるつきの かげのさやけさ
80	たいげん もんゐんのほりかは 待賢門院堀河	長からむ 心も知らず 黒髪 の乱れて今朝は ものをこそ思へ	ながからむ ころもしらず くろかみの みだれてけさは ものをこそおもへ

81	こくとくだいじのき だいじん 後徳大寺左大臣	ほととぎす 鳴きつる方を ながむれば ただ有明の 月ぞ残れる	ほととぎす なきつるかたを ながむれば ただありあけの つきぞのこれる
82	だういんほふし 道因法師	思ひわび されても命は あるものを 憂きにたへぬは 涙なりけり	おもひわび されてもいのちは あるものを うきにたへぬは なみだなりけり
83	くわうたいこうぐうのだい ぶ としなり 皇太后宮大夫俊成	世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る 山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる	よのなかよ みちこそなけれ おもひいる やまのおくにも しかぞなくなる
84	ふちはらのきまさけ あそん 藤原清輔朝臣	ながらへば またこのごろや しのばれむ 憂しと見し世ぞ 今は恋しき	ながらへば またこのごろや しのばれむ うしとみしよぞ いまはこひしき
85	しゆん え ほふし 俊恵法師	よもすがら もの思ふころは 明けやらで 闇のひまさへ つれなかりけり	よもすがら ものおもふころは あけやらで ねやのひまさへ つれなかりけり
86	さいぎやうほふし 西行法師	嘆けとて 月やはものを 思はする かこち顔なる わが涙かな	なげけとて つきやはものを おもはする かこちがほなる わがなみだかな
87	じやくれんほふし 寂蓮法師	村雨の 露もまだひぬ 真木の葉に 霧立ちのぼる 秋の夕暮れ	むらさめの つゆもまだひぬ まきのはに きりたちのぼる あきのゆふぐれ
88	くわう か もんるんのべつたう 皇嘉門院別当	難波江の 蘆のかりねの ひとよゆゑ みをつくしてや 恋ひわたるべき	なにはえの あしのかりねの ひとよゆゑ みをつくしてや こひわたるべき
89	しよくし ないしんわう 式子内親王	玉の緒よ絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶることの 弱りもぞする	たまのをよ たえなばたえね ながらへば しのぶることの よわりもぞする
90	いん ぶ もんるんのたい ぶ 殷富門院大輔	見せばやな 雄島のあまの 袖だにも 濡れにぞ濡れし 色は変はらず	みせばやな をじまのあまの そでだにも ぬれにぞぬれし いろはかはらず

91	こきやうごくせつしやう 後京極摂政 さきのだいじやうだいじん 前太政大臣	きりぎりす 鳴くや霜夜の さむしろに 衣かたしき ひとりかも寝む	きりぎりす なくやしもよの さむしろに ころもかたしき ひとりかもねむ
92	に でうあんのだぬ き 二条院讃岐	わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の 人こそ知らね かわく間もなし	わがそでは しほひにみえぬ おきのいしの ひとこそしらね かわくまもなし
93	かまくらの う だいじん 鎌倉右大臣	世の中は 常にもがもな 渚漕ぐ あまの小舟の 綱手かなしも	よのなかは つねにもがもな なぎさこぐ あまのこぶねの つなでかなしも
94	さん き まさつね 参議雅経	み吉野の 山の秋風 小夜ふけて ふるさと寒く 衣うつなり	みよしのの やまのあきかぜ さよふけて ふるさとさむく ころもうつなり
95	さきのだいそうじやう じ ぶん 前大僧正慈円	おほけなく うき世の民に おほふかな わがたつ袖に 墨染の袖	おほけなく うきよのたみに おほふかな わがたつそまに すみぞめのそで
96	にふだうさきのだいじやうだいじん 入道前太政大臣	花さそふ 嵐の庭の 雪ならで ふりゆくものは わが身なりけり	はなさそふ あらしのにはの ゆきならで ふりゆくものは わがみなりけり
97	こんちゆう な こんさだいへ 権中納言定家 (藤原定家)	来ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに 焼くや藻塩の 身もこがれつつ	こぬひとを まつほのうらの ゆふなぎに やくやもしほの みもこがれつつ
98	じゆ に む いへたか 従二位家隆	風そよぐ ならの小川の 夕暮れは みそぎぞ夏の しるしなりける	かぜそよぐ ならのをがはの ゆふぐれは みそぎぞなつの しるしなりける
99	こと ぼらん 後鳥羽院	人もをし 人も恨めし あぢきなく 世を思ふゆゑに もの思ふ身は	ひともをし ひとつうらめし あぢきなく よをおもふゆゑに ものおもふみは
100	じゆんとくあん 順徳院	ももしきや 古き軒端の しのぶにも なほあまりある 昔なりけり	ももしきや ふるきのきばの しのぶにも なほあまりある むかしなりけり